

「そうか、それでは、お前の田からは八石の米と、畑からは五斗の穀物がとれるようにしてあげよう。そのかわり、約束を守らなかつたら、お前は一夜のうちに命をおとすぞ」と言うが早いか、自現太郎もお姫様の姿も、藤沼神社の方に消えてしまった。

その年から、太郎兵衛の田からは反当り八石の米と畑からは何を作っても五斗の穀物が、毎年取れるようになった。

村人たちは、こうして一年毎に裕福になっていく太郎兵衛のことに疑惑をいだくようになった。

「太郎兵衛のやつ、米や豆など借り歩いていたのに、最近はずいぶん裕福になりやがったが、他人の物をぬすんでいるのでは……」ということになった。

いくら太郎兵衛が、「オラの田圃からは八石の米と畑からは五斗の穀物がとれるんだ」と弁解しても、村人たちは信用しようとはしなかった。

思案にくれた太郎兵衛は、ついに村の集会のあつたある日、多ぜいの村人たちの前で、「これこれこういう由で」と、自現太郎さまにあつたことやお姫様にあつたことの一切を話してしまつた。

その夜、太郎兵衛は床の中で冷たくなつていた。今でも太郎兵衛の作つていた田を八石田、畑を五斗畑と呼んでいる。

(話者 江連 栄)